

教室の言葉は子どもとの約束事

京都女子大学教授
吉永 幸司よしなが こうし

「「なあんだ。そうだったのか。」はあきうめ？」

教育実習生の授業を参観したときのことです。ある子どもが、指名を受けようと張り切っていました。「はい。」と大きな声を出したり、体を乗り出したり、さらにはいすの上に立つなど、精いっぱいのパフォーマンスで注目を浴びようとしていました。教育実習生は、その子に対して、

「自分の席に座って、黙って手を挙げたらいいのです。」という指示をしました。指示どおりにすれば指名してもらえろと思っただけでしょう。いすに座り、黙って挙手をし、指名を待ちました。その子が次には当然指名されるだろうという雰囲気がありました。しかし、その子は指名をされませんでした。

「なあんだ。そうやったのか。」

と、残念そうなつぶやきとともに、急に意欲がなえてい

くのがよくわかりました。指示どおりにしたのに、結果は違っていることへの残念な気持ちだったのでしょう。子どもたちには、指示どおりにしてもしなくても、指名をしてもらえないんだと思ってあきらめないでほしいという思いで教室をあとにしました。

二「先生はいつそをつくのよか。」と言われ

実習生の授業にこんな感想をもったのは、わたし自身の同じような苦い経験を思い出したからです。

日記の指導に夢中になっていたときのことです。帰りの会で、「このごろ、がんばって日記を書いている人」の紹介をしたことがありました。十人を超える子どもの名前をあげ、激励をしたつもりでした。その中に、水木君（仮名）の名前はありませんでした。水木君は日ごろからよくがんばっていて、いまさら紹介をする必要

がないと思っていました。

ところが、水木君はその日のことを、日記に次のように書いてきました。

「先生に聞きたいことがあります。日記をがんばっている人の紹介に、ぼくの名前はありませんでした。先生は、いつも赤ペンで、このごろがんばって日記を書いている、と書いていてくれます。あれは全部うそだったのですか。先生はうそをつくのですか。」

という意味のことを書き、ほめてもらったときの赤ペンの文字を克明に書き綴って持ってきました。そのときの気持ちや事情をいかに説明しても、言い訳でしかない言葉の水木君に返すだけでした。

「水木君も、いつもよくがんばっている。」というひと言を惜しんだことで、大きな借りを作ったような思いが今も胸に残っています。

三「時間を守ってください。」の奥にあるもの

読むことの授業で、感想を書く活動を取り入れたときでした。簡単に書かせればいいという気持ちで、

「五分で書きましょう。」

と指示をしたのです。しかし、実際は十五分ほどの時間をかけてしまいました。五分の段階で書けない子に、も

う少し時間を延ばそうと配慮をしたつもりでした。

「五分という時間を守ってください。初めから十五分とわかっていたら、もっと落ち着いて考えていました。」と不満を述べる子がありました。初めから、時間と内容を考えていた子にとって言い分は当然だと思いました。

「五分という約束の時間になりました。この後、話をしますか。書く活動を続けますか。」

その後の授業は、このように、約束したことを確認して進めるように心がけてきました。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

教師が子どもに伝える言葉で曖昧あいまいなものがたくさんあります。「わかりません」という子に「考えておいてください。あとで、発表をしたらうからね。」と約束をしても、そのことを子どもとの約束として意識していることはあまりありません。結果として指名をしないまま終わり、「先生、あとで発表してもらおうというのはどうなったの。」と言われ、「ごめん」というほかはないこともたびたびです。

教室の言葉は子どもとの約束事としてとらえ、もっと大事に、丁寧に使いたいと思うこの頃です。